

桑原武夫集

8

1969
)
1974

岩波書店刊行

桑原武夫集 8

第八回配本(全十巻)

一九八〇年一月一八日 発行

定価四〇〇〇円

著者 桑原武夫*

発行者 緑川 亨

発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五番五号 株式会社 岩波書店

電話 〇三二六五四二二
振替 東京 六一六二四〇

印刷・三陽社 製本・青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 桑原武夫 1980

凡 例

一、この集は、桑原武夫の作品の中から、代表的ないし主要的と思われるものを、著者が自選し、これを年代順に配列し、十巻にまとめたものである。

一、配列は、ジャンルの如何を問わず、すべて発表年代順によった。ただし、編集の都合上、厳密に順序に従えなかつた場合も稀れにある。

一、初出の場所と年月は各作品の末尾にしるした。

一、挿入写真のうち、桑原撮影のものには*印を付した。

一、テキストは原則として最近のものを用いた。また、今回若干の訂正を加えたものもある。以後これを定本とする。

一、反訳、対談、座談は収めないが、調べのつく限り、全著作目録には記載した。

一、第十巻には、全著作目録、年譜、索引を入れる。

目次

凡例

一六九	思い出すこと忘れえぬ人	2
一七〇	ブータン入国記	190
	矢野仁一先生のこと	197
	一致と影響	203
	『中央公論』創刊一〇〇〇号を迎えて	222
一七一	流行言	228
	ヨーロッパ文明と日本	231
	奇人	309
	高橋和巳への弔辞	314

駒井能登守のために	317
林達夫について	336
カタカナの氾濫	356
昔話	362
人間性について	368
一五三	
三上章を惜しむ	380
書についての雑談	387
夢	393
川端康成氏との一夕	398
大事件にひもをつけよ	402
松本清張の処女作	406
平和の条件としての文化	420
大学生と俳句	433

世界の日本学	440
明治革命と日本の近代	446
石油の国	474
モスクワとバクー	478
ヨーロッパの出かせぎ労働	483
志賀高原と三好達治	487
志賀さんの思い出	491
好きなことば	496
奈良時代の志賀さん	498
永井荷風の生活と芸術	504
鉄斎の芸術	555
自 跋	575
挿絵目録	593

1969



打它家表門

思い出すこと忘れえぬ人

1 幼年期の断片

「むかしの人は、言うべきことははっきり言うが、そのほかは無用の口をきかず、言うべきことも、いかにもことば少なくて意をつくした」という言葉で、日本最初のすぐれた自叙伝『折たく柴の記』は始まる。新井白石はついで、自分の父がいかに寡言であつたかを述べたあとで、「そういうふうだったから、残念なことに、おたずねしたいと思うことも言いだしかねて暮らすうちに、なくなられたので、それつきりになつてしまつたことが多い。世間普通のことならば、それでもよかつた。父や祖父のことがこまかにわからないのは残念だが、いまはもうたずねる人もない。この残念さを思うと、私の子どもたちも、また私と同じようになることもありうると覺つた」。そこで白石は、子孫のために自分の一生を物語ろうとするのである。

とりとめもない思い出雑記を数ヵ月連載しようとするその枕に、大儒の不朽作を引合いに出すのは大げさにすぎようが、私もまた父母や祖父母のことはわからないことが多くて、残念に思うことがある。父は、日本における近代東洋学の樹立に多少とも貢献した一人だったから、その事跡は必

らずしも家族的感傷的好奇心の対象にとどまらず、なんらかの形で学界ともつらなっているわけだ。昨年（一九六八年）末、完結したその全集の最終巻に、私は父の小伝と略年譜をつくったが、正確な日付をつかむことがいかに困難かということを改めてさとった。公務員としての辞令のたぐいは、公文書があるから疑いえないが、私的な日付となると、よほど重要なことでも、年がたつとわからなくなるものだ。

前に中江兆民の研究をしたさい、兆民に厩馬とらうまという早世した弟があることは周知のことだが、その死亡年月日はついにつかむことができなかつた。厩馬の未亡人の甥にあたる方にまでお頼みして、調べてもらったが、いまだに未解決である。私は歴史好きといっても、実証的考証学者としての素質に欠けているのではないかと反省もしてみたが、いまのところ、どう取りついでいいのかわからないままである。人の記憶は不確かなもので、紙に書いておかぬ以上、心のなかでどのように哀歎の情につつまれていようと、特に数字など、年とともに剝落してしまうのだ。

こんど父の小伝と略年譜をつくって驚いたことは、父と母が何年何月に結婚したのかわからないことであつた。現に私という人間が生まれており、父母は仲よく暮らし、ともに数え年六十三まで生きたのだから、結婚の日付など不明でよいのかも知れぬが、その不明を私自身が今まで意識せずにはいたことはやはり変な気持であつた。戸籍謄本では、隠蔵ひそぞうは打它うたしんと明治三十六年十月二十六日に結婚を届出ているが、長男武夫は、翌年五月生まれである。月たらずということになる。し

かし、これは驚くべきことではない。結婚式はするが、入籍の届出は、期間をおいてから、とくに懐妊が確かになってからすることが、最近まで慣習としてかなり一般的であった。じつは私自身もそうである。家内は不満のようだったが、私の母は古い習慣を変えようとせず、五月の結婚を十月になってから届出て、子供は四月に生まれた。母は自分と同じようにしたのかもしれない。

一組みの男女が新家庭をつくり、子孫が繁栄すれば、それでよいことであって、結婚式の日取りなど、重要でないと考えられるかもしれない。前向きな生活人として結構な考え方と思われる。しかし、自他ともに堅実な実証主義者と認めていた父については、そう簡単に不明ときめこんでは悪いような気がした。

きちょうめんな父は、日記をずっとつけており、博文館の「当用日記」は、明治三十四年から死ぬ年の昭和六年まで残っている。それを通読すれば、万事わかるはずと思うかもしれないが、それは日記に空白の日のないことを前提とする。私がこれを一ページ一ページめくってみようとしたのは、父の病歴を確かめたいと思ったからだったが、まったく不成功に終わった。父はがんらい蒲柳の質で、命をうばわれた結核のほか、中耳炎、胆石、丹毒など、命をおとしかけたことがたびたびあった。ところが病臥中および予後の静養期間中は、父の日記帳は、思い切りよく空白のままになっている。事後の記入はいっさいしてないのであった。

結婚前後のころ、父は東京高等師範学校の教授であったが、春、夏、正月の休暇には、必らず越

前敦賀の実家に帰省している。その帰省期間中は日記帳を携帯しなかったのか、まったく空白になっている。文献に記載のない史実は、あたかも存在しなかったかのように考えたがる歴史家を、私はここでもう一度ひやかしたくなかったが、いま歴史家の立場にいるのは父ではなくて私なのだ。文字が頼りにならなければ、人間に頼る以外はない。

継体天皇が炭焼きをしていたと伝えられる越前の日野山のふもとに、鑄物師いもじという七十戸ばかりの村がある。十二世紀に、勅勤にふれて越前の国に流されたある中納言がここに居をさだめて以来、そのままいまに及んでいる。屋敷も当時のままに昭和のはじめまで残っていた。土壁も下地竹したじを使わずにそだを組合せ、その上に土が塗ってあった。当然保護建築物に指定されるはずのところ、居宅だからと懇願して、やっと見のがしてもらった。私の従姉、つまり父の兄の長女、櫃尾かじ文子さんがここにとついでいる。私の身内で、昔のことを知っているような唯一の人である。この七十五歳の老婦人の家を私は二十年ぶりで訪ねてみようとした。

時雨がときどき降ってはまたあがる晩秋の北陸線を、それしかない各駅停車の二等車で行った。久しぶりでふるさとのなまりを聞きながら見る窓外の晴れ間の光にてらされた雑木林の紅葉の色は、京都とは違ってわびしげに美しかった。それは私の感情移入のせいかもしれず、描写はひかえるが、改築してモダンになった玄関わきにたたずんで待ってくれた文子さんは、足が不自由というほか、

まったく元気であった。

私の祖父、桑原久兵衛にとって、文子さんは初孫であった。一生を勤勉努力のうちにすごし、晩年、敦賀の旦那衆、おそらく十人のうちに数えられるところまでたどりついた製紙業者にとって、この孫娘は、目に入れても痛くない晩年の慰藉であった。彼が中風で永眠したのは、文子九歳のときだから、もう何もかもよくおぼえているはずだ。私の祖父がなくなつたのは、明治三十四年九月七日、そのとき久兵衛は数え年六十九であったことを、私はこんどの訪問ではじめて知つた。

愛情のみがこうした正確な数値をおぼえさせることができるのだ。いや、そう言つては簡単すぎよう。私の父は祖父のことを語るとき、目がしらの光らぬことはなかつた。命日を忘れていたわけではなからう。しかし、彼は無信仰であつて、生涯家に神棚ないし仏壇を置かず、亡父のために供養をするといった考えに到達することはなかつたので、母も私も、その日取りを知らなかつたのだ。私にしてみれば、家にある古ぼけた、拙い肖像画でしか会つたことのない人の没年をきく氣を起さなかつたとしても、自然であらう。

桑原家の祖先は、もと朝倉義景の家臣であつたが、義景が滅びてから敦賀の御手洗みたらしに住んで、代製紙業に従事してきたらしい。ここを流れる御手洗川は今ほよごれて溝川のようになつてしまつたが、もとは清流で、明治中期まではアユもいたという。その水質がよいのでこの辺りにはガンピ、ミツマタなどを材料として鶏卵紙とりたまごみをつくるものが多く、もとは紙屋町といった。そのほか近年、東

洋紡などの大工場ができて、地下水をやたらに吸い上げるようになってから枯渇してしまったが、由来敦賀は掘抜井戸で有名であった。美しくゴボゴボと盛り上がるように湧いてくる清冽な冷水、それで一種粗野な葛まんじゅうをひやしておいて食べるのを「水洗まんじゅう」といったが、そのイメージは私には今もなつかしい。御手洗地区には掘抜井戸が多かった。これまた製紙に役立ったであろう。

明治以後、洋紙に押されるなかで、最後まで転業しなかったのが鳥ノ子屋久兵衛であった。その先代はどういう人であったか、ともかく酒を飲みすぎて若死したらしい。久兵衛は十六のとき家を継いでいる。十八のとき、大火で家を焼いたが、これにめげず、焼跡に二階建ての紅殻塗りの京都風の家を建てた。当時敦賀の町家では、二階建てはほとんどなかった。久兵衛は万事進取の気象に富んでいたように見うけられる。

私の父の母は、疋田村の長谷川氏から来たと従来私は書いてきたが、それは私の母ないし私の聞きぞこないであった。疋田の造り酒屋、長谷川家へは、久兵衛の弟が養子にいたのである。この人は、無上の遊びずき、釣りずきで、最後は、疋田川で鮎釣りをするうちに落命したという。久兵衛の妻は、東浦の比田村の田代太兵衛の娘で、そのあとを父の弟、勘三郎がついだのである。私の叔父はたしかに田代勘三郎なのだから、そう教えられて私は文子さんに反論することができなかつ

た。名は不確定だが、やえといったらしい。子どもは女が数人あったが、みな早世して、喇一郎せいでいちろう、隲蔵、勤三郎の三人のみが育った。

私の父は、四つのときに母を失った。紙佐(中川佐太郎、第一巻所収『町一番の風呂』参照)という同業の紙屋の妻が、父の乳母役をつとめ、勤三郎は漁師まちへ里子に出された。ここでまた私はいままで錯誤をおかしていたことに思いあたった。久兵衛には妾があり、これが家に入ったと書いてきたのである。これは過ちで、妾は最後まで家に入れられることはなかった。久兵衛は、そうしたケジメをきかすのが好きであったという。

彼は精励恪勤であったが、妻の死後は、家政を自分で切り盛りし、食事の献立もみずから考案し、それを女中につくらせたという。質素儉約を旨としたらしい。しかし、同時に謡曲の天狗であり、どれほど理解できたかは疑わしいが、熱心に漢文を勉強した。そのあらわれが、子どもにやたらにむつかしい漢字名まえをつける結果となったのだ。どこかうれしがり屋の、術学趣味があったように見うけられる。文子さんは、おじいさんは厳格だが明るい人柄だったと言っている。エネルギーッシュであったことはまちがいない。

私の父に初恋の人があったことは、別に書いた(第七巻所収『こころづくし』)。その後、博文館の大橋家から養子にと望まれたが、父は峻絶した。私の母、打它しんをすすめたのが郷党の先輩、刀根亀次郎であることは確かだが、それがどういう経過でまとまったかは、いっこうにはっきりしない。

父の日記は、「狩野君来訪」「実家より来信」「教授会出席」といった調子で、各行に一句ずつ一日数行書いてあるだけで、何を話したのか、何をしたのか、何が起ったのか、内容は例外的にしか記載されていないから、なにも実証できない。父は自分の私生活に関するかぎり歴史記録者としては失格といえる。ただ、しんととの訪問や通信などの頻度から推して、明治三十四年のはじめには、話はかなり進んでいたように見うけられる。文子さんの言うところでは、その二月、久兵衛は中風で臥床することになったので、万一を考え恐らくその春、「敷居またぎ」がおこなわれたらしい。病床の久兵衛に正式にあいさつし、婚約をかためたわけである。十六歳のしんはかわいい被布ひふを着て、こっぴり下駄をはいて来たのを、鮮やかにおぼえていると文子さんは言った。

敷居をまたいで、はつきり桑原家の人となることを公示したとはいっても、その後、いつ結婚したのかわからない。家のアルバムには、結婚写真はちゃんとある。鷹蔵は紋付、羽織袴、しんは角かくしに綿入れの三つがさね、私のせがれと娘にどこか似ているのがまず気になるが、緊張のおももちである。服装から、およそ冬とわかるが、裏面にはなんら日付の記載がない。久兵衛のための服喪一年間は避けただろうから、明治三十五年の冬とみるのが穏当なところであろう。

休暇になると、父は必ず実家に帰り、その二階のひと間に住んだ。その間、母はそこで同棲をしていたらしい。休暇があけて父が帰京すると、打它家の女中が迎えに来て、大きな風呂敷包み

を持って里へ帰っていったというのは、また文子さんの証言である。在京中は、かなり頻繁に手紙のやりとりをしていたらしいことは、当日日記の来信・発信欄に打它しんという記載が多いことでもわかる。

明治三十六年十月一日に「打它しんより来信(懐妊のこと)」とあるのは、私にとってショックであった。どうして打它などとよそよそしく旧姓を書くのか。結婚届出がそれから二十五日後であり、その胎児が私であることはさきに書いたが、五月十日の誕生日の日記は空白なのである。明治三十七年七月五日には、「武夫の写真到来、真に可愛可愛」などと書いているくせに、一家がいっしょになるのは、その年の十月二十日、母が私と近所の大工の娘、お春というのを女中につれて新橋駅へ着いてからである。

父は明治三十一年に、日本における東洋史概説の最初といわれる『中等東洋史』二巻をすでにあらわし、三十四年からは、史学会評議員となっていた。学問研究が忙しかったにせよ、当時の東京の住宅事情がどうであったにせよ、母や私を長いあいだ放置しておいた怠慢は、私には賛成できない。

私たちは小石川伝通院の横に住んだらしい。丘浅次郎、幸田成友が隣人であったと聞いている。私をはじめ歩いて歩いたのは家の近くのお稻荷さんの境内だと教えられたが、あの辺に稻荷があったのかどうか、行って見たこともない。